

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12796

研究課題名（和文）高校生の高度学習に大学図書館・専門図書館の利用は有効か？ 図書館連携の多角的分析

研究課題名（英文）A research on the effectiveness of using university libraries and special libraries for advanced learning of high school students

研究代表者

小野 永貴 (Ono, Haruki)

筑波大学・図書館情報メディア系・助教

研究者番号：10592868

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、高度な学習を行う高校生に対する支援として、大学図書館や専門図書館などの高度な図書館の資料を高校生も利用できるようにする連携形態に着目した。この連携のニーズや効果を明らかにすべく、本研究は5種類の調査を組み合わせ実施した。（文献調査、アンケート調査、高校生の執筆論文の分析、インタビュー調査、履歴データ分析）その結果、探究学習を実施する高校の生徒からは、高度な資料のニーズが存在しており、連携に教育的な価値があることが明らかになった。また、早期から高度な資料を利用することにより、高校卒業後の円滑な情報資源利用へ至る成長を促進するプロセスも確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、日本各地の大学で図書館の高大連携は実践されてきたが、その効果や影響は十分に検証されておらず、むしろ運用上の問題やコストが懸念される場合もあった。本研究は、高校生の実態に関するエビデンスに基づき、図書館の高大連携の教育的価値を明らかにした点で、社会的意義が大きい。また、図書館の高大連携という枠組みは、これまで教育学分野および図書館情報学分野の双方で十分に議論されてこなかった。本研究は、新たな高大連携研究の領域を切り拓いた点で、学術的にも意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research focused on a form of collaboration in which materials from advanced libraries (e.g., university libraries and special libraries) are made available to high school students as support for high school students engaged in advanced study. In order to identify the needs and effects of this collaboration, this research was conducted using a combination of five different surveys. (literature review, questionnaire survey, analysis of papers written by high school students, interview survey, analysis of library usage data) The survey results indicate that a need for advanced materials exists among high school students who conduct inquiry-based learning, and that there is educational value in collaboration. The results of this research also found that early access to advanced materials facilitates a process of growth that leads to smooth use of information resources after high school graduation.

研究分野：図書館情報学

キーワード：高大連携 高大接続 大学図書館 学校図書館 高校生 探究学習 情報リテラシー

1. 研究開始当初の背景

近年、日本の高等学校の教育が高度化している。新たな学習指導要領では、初等中等教育においてもアクティブラーニングの導入が明記され、探究的な学習活動が全教科にわたり重視されるようになった。また、学習指導要領改訂以前から、これを先取りするように、国が一部の学校を指定して、学習指導要領の規程をこえた高度教育を認める「スーパーサイエンスハイスクール (SSH) 事業」や「スーパーグローバルハイスクール (SGH) 事業」が実施されており、指定校が年々増加している。そして、探究学習やアクティブラーニングが重視される次代の教育においては、学校図書館がその中核として機能することが期待され、各種有識者会議や報告書においても度々言及されている。

一方で、学校図書館の現状をみると、このような高度教育への対応が容易ではないことは明らかである。文部科学省「学校図書館の現状に関する調査」および全国学校図書館協議会「学校図書館調査」によると、高等学校の平均図書購入費は減少傾向にあり、蔵書数もほぼ増加していない。探究学習において重要となる百科事典等の参考資料についても、刊行後 10 年以上経過しているものが多数を占める学校が多く、最新資料への更新が追い付いていないことがわかる。このような状況において、急速に展開される高等学校の高度教育に、学校図書館が単体で追従することは難しいと予測される。

2. 研究の目的

上記のような問題への解決策として、従前より図書館は「図書館連携」の仕組みを有してきた。特に学校図書館の場合、近隣の公共図書館と連携して、資料の団体貸出や授業での集団訪問が行われている。一方で、スーパーサイエンスハイスクールやスーパーグローバルハイスクールといった次代を先行する高度教育の場合、特定分野において大学入門レベルのテーマを扱ったり、突出して専門性の高い課題を課すこともあり、従来の公共図書館資料では不十分なことがある。

そこで本研究では、学校図書館と大学図書館・専門図書館の連携という新たな枠組みに注目する。高度な学習を行う高校生に対し、学校図書館に限らない高度な図書館のコレクションも利用可能にすることで、有効な支援となり得るのではないかという仮説を検証し、次代の高校教育を支える新たな図書館連携モデルとして提案することを目的とする。

3. 研究の方法

研究代表者は、過去の研究で、高校生が大学図書館資料を直接利用できる国内事例として、付属学校の生徒に大学図書館利用権を認めている大学に着目し、フォーカス・グループ・インタビュー法を用いて、生徒の図書館使い分け基準を分析した (奨励研究 / 課題番号 25907014)。

この先行研究を発展させる形で追加調査を行うべく、本研究では主に以下の手法を組み合わせさせて実施した。

- (1) 文献調査を通じた関連分野の議論の変遷および国内外の動向の確認
- (2) アンケート調査による全国の高校生の図書館利用に関する実態解明
- (3) スーパーグローバルハイスクール事業採択校を対象とした、生徒執筆論文に記載されている参考文献リストの分析
- (4) 高校時代に大学図書館を利用可能であった卒業生に対する回顧的インタビュー調査
- (5) 高校生による大学図書館利用の履歴データ分析

4. 研究成果

(1) 文献調査では、学校図書館と大学図書館の連携および高校生による大学図書館の利用に関する事例に焦点をあて、関連分野の議論の変遷および国内外の動向の確認を行った。その結果、日本国内においては、高大連携の取り組みを行う図書館の事例は多数あり、雑誌への実践報告掲載や、各館・各学校の Web サイト上における広報記事掲載などにより、実施過程が公表されているケースは複数確認された。2010 年代の後半以降は、複数の事例にまたがる分析的な考察や、全国的な動向に関する調査も実施されるようになったことも確認された。しかし、いずれの報告も図書館や司書の視点から執筆されたものが多く、高校生の視点での学習実態や影響について記した報告は少ない状況であった。

海外に着目すると、米国では、1960 年代より図書館の高大連携に関する実践報告や調査・研究が多数行われていることが確認された。特に、情報リテラシーの観点で教育的価値が高く認められ、高校図書館を大学図書館での学術活動への導入と捉える言及も早期から見受けられた。その上で、高校生の利用による大学図書館空間の混雑など、実務上の課題も多数言及され、利点とコストのバランスが両面から議論されてきている。しかし、その連携の効果や意義の根拠となる研究は、いまだ不足していることも言及されている。特に、複数の館種にまたがって高校生の利用実態に関する調査が必要と提言されてきているが、そのような研究事例は非常に少ないことが明らかになった。

(2)アンケート調査では、全国の高校生の図書館利用に関する実態解明を行った。これにより、高校生の日常の文献入手先や潜在的な情報ニーズを明らかにし、そのデータを通して大学図書館が高校生の学びの支援に資する可能性を考察した。調査は、全国の高校生約400名を対象としたオンラインアンケートとして実施した。アンケートの配布および回収には、未成年者の登録者が多い「LINEリサーチ」のプラットフォームを使用した。

調査の結果、高校生は調べものをする際に、インターネットを利用する割合が非常に高く、図書館の利用は限定的であることが明らかになった。特に、大学図書館を組み合わせるといふ回答はほぼ存在せず、全国規模の集計においては、高校生の文献入手先の候補として大学図書館は定着していない実態が明らかになった。

(3)次に、探究学習を既に実施してきた学校における実態を把握すべく、スーパーグローバルハイスクール事業採択校を対象として、生徒執筆論文に記載されている参考文献リストの分析を行った。具体的には、スーパーグローバルハイスクール採択校から、生徒が執筆した論文をオンラインで公開している学校を抽出し、調査対象校として選定した。そして、生徒執筆論文の参考文献リストに記載されている書誌の同定を行い、種別を分類したうえで、図書については図書館における所蔵状況を調査した。

その結果、一部の高等学校では、大学図書館レベルの資料を参考文献として使用し論文執筆が行われている実態が明らかになった。オープンアクセスとなっている学術論文が引用されていたり、学校図書館や近隣の公共図書館では所蔵されていない資料の引用も確認された。これらのデータから、探究学習が実施される高校の場合においては、大学図書館レベルの資料を利用するニーズはあることが推定された。

(4)さらに、図書館の高大連携が与える効果を高校生の視点から検討すべく、高校時代に大学図書館を利用可能であった卒業生に対する回顧的インタビュー調査を行った。具体的には、スノーボールサンプリング法により上記条件に該当する調査対象者へアプローチし、オンラインもしくは対面で半構造化インタビューを実施した。そして、発話記録の文字起こしを行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)の手法で分析を行った。これを通し、調査対象者らが高校在学中から高校卒業後にわたって、どのような意識をもって情報資源を利用してきたかというプロセスの解明を行った。

その結果、高校時代に大学図書館の利用権を与えることは、高校時代の探究学習における文献入手の円滑化に資するだけでなく、大学進学準備として情報リテラシーを早期育成する意義も期待できることが明らかになった。大学図書館の利用権を与えられた高校生は、大学図書館の特性や留意点を早期に把握し、学校図書館や公共図書館なども組み合わせ、情報資源の入手先を意識的に使い分けられるようになるプロセスが導出された。そのうえ、大学入学後に新たな情報資源の入手先を自ら発見し、社会人になった後も国立国会図書館など他の高度な図書館の利用に至るプロセスも確認された。以上のことから、高校生に対し学校図書館に限らない高度な図書館のコレクションも利用可能にすることは、高校時代における情報資源の利用や学び方を変化させるだけでなく、その変化を大学入学以降も持続させ、長期的な成長を促進する効果を有すると、結論づけた。

一方、大学図書館に対してネガティブな意識をもち、高校時代に有効活用へ至らないプロセスも確認された。これは、たとえ高校生へ大学図書館の利用権を与えたとしても、高校入学直後に図書館ガイダンスを1回実施するだけでは不十分であるということを示している。一律的なガイダンスの実施のみならず、授業の課題や個人的関心に基づいて専門的資料を欲する機会が生じるよう、継続的な動機付けを図ることの必要性が示唆された。

(5)最後に、補助事業期間最終年度においては、高校生の大学図書館利用に関する履歴データ分析の開始を試みた。付属高校生へ大学図書館の利用権を与えている特定の大学・学校から協力を得て、約7年間分の匿名化された貸出履歴を分析した。学校図書館を利用した生徒と大学図書館を利用した生徒の人数比や大学図書館の利用日数(再訪の有無)を集計することで、先の(4)の考察として提案した「継続的な動機付けを図ることの必要性」の根拠となるデータを、得ることができた。

<引用文献>

小野永貴, 徳光亜矢子, 下山佳那子, 佐藤翔. 複数館種を対象とした高校生の図書館利用行動に関する実態調査. 情報知識学会誌. 2013, vol. 23, no. 2, p. 259-264.

蒲生英博, 瀬戸有希子, 杉浦未布子, 寄本真里, 阿部由貴. 高大連携における大学図書館の役割. 大学図書館研究. 2020, vol. 116. p. 2071-1-2071-14.

Craver, K. W. Use of academic libraries by high school students: Implications for research. RQ. 1987, vol. 27, no. 1, p. 53-66.

Burhanna, K. J. Instructional outreach to high schools: Should you be doing it? Communications in information literacy. 2008, vol. 1, no. 2, p. 74-88.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Haruki Ono	4. 巻 10
2. 論文標題 Changes in the Thinking and Behavior of High School Students Gaining University Library Access: Effects of High School-University Collaboration to Learn Using University Libraries	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proceedings of 2021 10th International Congress on Advanced Applied Informatics	6. 最初と最後の頁 261-268
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Haruki Ono	4. 巻 10
2. 論文標題 The Value and Issues of Opening University Libraries to High School Students: Based on a Survey Investigating the Processes by which Japanese High School Students Use University Libraries	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proceedings of 2021 10th International Congress on Advanced Applied Informatics	6. 最初と最後の頁 41-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野永貴, 常川真央, 宇陀則彦	4. 巻 学校図書館学研究
2. 論文標題 新型コロナウイルス感染症に伴う図書館利用制限が高校生へ与えた影響に関するオンラインアンケート調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学校図書館学研究	6. 最初と最後の頁 34-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野永貴, 宇陀則彦	4. 巻 18(1)
2. 論文標題 高大連携における大学図書館の利用可能性 スーパーグローバルハイスクール校での課題研究における文献利用実態	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 図書館情報メディア研究	6. 最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小野永貴	4. 巻 67(10)
2. 論文標題 大学の一般情報教育と接続・統合した情報リテラシー教育 ~小中高大で一貫した情報リテラシー教育への課題~	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 情報の科学と技術	6. 最初と最後の頁 539-545
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小野永貴	4. 巻 19
2. 論文標題 情報入試を越えた情報教育の高大接続に向けて - 共通テストの先を見据えた情報科へ -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ニューサポート高校「情報」	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計2件(うち招待講演 2件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 小野永貴
2. 発表標題 アクティブラーニングと学校図書館 ~高校・大学での実践を通して考える学習支援のあり方~
3. 学会等名 岐阜県図書館協会(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小野永貴
2. 発表標題 『未来を語る』~教育をデザインする。探究学習の先にあるもの~
3. 学会等名 図書館総合展2022 カンファレンスin鳥取(招待講演)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------